

状態自尊感情の測定とその展望

——状態－特性自尊感情の視点から——

箕浦有希久・成田 健一

自尊感情の定義と研究間の齟齬

自尊感情 (self-esteem)⁽¹⁾は、“自己に対する肯定的あるいは否定的な態度 (Rosenberg, 1965)”, “自分自身に対する肯定的評価 (Baumeister, 1998)”, “自己概念と結びついている自己の価値と能力の感覚 (遠藤・井上・蘭, 1992)”といった定義が唱えられている。ほとんどの自尊感情の定義に共通していることは、自分のことを好ましく感じたり、自分を有能だと信じたりする程度を反映したもの (Tafarodi & Swann, 1995 ; Zeigler-Hill, 2013) だという点である。

このようにとらえられてきた自尊感情は、心理学のみならず、教育学や社会学を始めとする社会科学のあらゆる学問分野において、基礎・応用を問わず、広く注目を集めている (Donnellan, Trzesniewski, & Robins, 2015)。それは自尊感情が、人の幅広い精神的健康や社会的な適応および成功といった特徴と、密接な関連があると考えられてきたからである (Zeigler-Hill, 2013)。実

(1) “self-esteem” の訳語として、“自尊感情”という語だけでなく、“自尊心”という語が用いられたいり“セルフ・エスティーム”というカタカナ表記が用いられたいりする場合がある。わが国における“self-esteem”の訳語について、現在のところ統一したコンセンサスは得られていないと思われる。本論文では、先行研究で使用されている“self-esteem”のさまざまな訳語の間に本質的な意味の違いや、概念の定義上の大きな差異は無いものと考え、“自尊感情”という表記を一貫して使用する。

際、多くの場合、高い自尊感情をもつことは望ましいこととされ、ポジティブな心理的特徴とみなされている。かつては高い自尊感情が、社会の問題や病理のすべてをたちどころに改善してしまう、奇跡の万能薬であるかのような風潮さえあったと言われている (Heatherton & Wyland, 2003)。

しかし、自尊感情の高低と適応や健康の間に、あまりに単純で固定的な関係性を想定することは危険であり、近年はそうした安易な見方に異を唱える研究者も少なくない。たとえば、高い自尊感情には自己愛的な特徴も併存しているため、自尊感情が脅かされるような状況におかれたとき、他者への攻撃性が高まったり (Baumeister, Smart, & Boden, 1996; Bushman & Baumeister, 1998)、自分を律することに失敗したり (Baumeister, Heatherton, & Tice, 1993) といった、不適応行動がみられるとの指摘がある。また、自尊感情の高低だけでなく、短期間のうちに自尊感情が高くなったり低くなったりと変化しやすいこと、つまり自尊感情の変動性が不適応的特徴と関連していることも指摘されている (Kernis, Grannemann, Barclay, 1989; Kernis, Grannemann, & Mathis, 1991)。

こうした研究間の齟齬の問題は、言い換えると、自尊感情の“特性”に関わる研究と、自尊感情の“状態”に関わる研究間の問題ととらえ直すことができるだろう。つまり、高い自尊感情と適応の関係性を指摘する研究は、安定的な“特性”について、逆に高い自尊感情が必ずしも適応と関係するわけではないことを指摘する研究は、変化する“状態”について、それぞれ言及していたのである。同じ“自尊感情”という言葉を使っている、“特性”と“状態”という異なった概念にそれぞれの研究が注目していたのであれば、研究間にある種の齟齬や矛盾が生じてしまうのは当然のことである。

さらには、測定方法にも相違が存在している。詳細は後述するが、自尊感情の“特性”に関わる研究では、単発測定 (one-shot measure) と複数回測定 (multiple and repeated measures) の個人内平均値という異なる指標が存在しており、自尊感情の“状態”に関わる研究では、実験室と日常生活場面のそれぞれで、異なる尺度が用いられている。

このように考えると、高い自尊感情をもつことが適応的であるのか、それとも不適応的であるのか、という過去の研究知見の不一致については、それぞれの測定方法を視野に入れた上で、“状態－特性”の観点から整理することが必要不可欠であろう⁽²⁾。そこで本論文は、これまでの状態自尊感情研究の流れに注目して、“状態－特性”の観点から研究間の矛盾を解きほぐし、今後の自尊感情研究を切り開く方法論的な展開を指し示すことを目的としたい。

状態－特性という考え方

心理的構成概念に対して“状態－特性”という枠組みを想定し、その領域の研究を進展させた重要な先例として、まず Spielberger による不安の研究を紹介したい。

不安とは、“不幸、大災害への遭遇、身体への緊張、心配などの特徴をもつ気分による状態 (VandenBos, 2007 繁榎・四本監訳 2013)”や、“自我の危機としてだれもが経験する心的反応であり、不確定性と無力感を伴う心理的状态 (岡村・津田, 2013)”を意味する。1950年から1960年の不安研究において、質問紙形式の自己報告による測定結果と、生理・行動的反応による測定結果の間に、結果の不一致や混乱がみられるという問題が指摘されるようになった (古賀, 1980)。本来、質問紙であれ生理・行動的反応であれ、不安という心理的構成概念を測定できているならば、両者は一貫した結果がみられるはずである。

この問題について Spielberger (1966) は、生理的測定は情動状態としての不安の強度を反映するものであるのに対して、質問紙による方法は人格特性としての不安を測定すると考えた。そして、状況依存的に生じる一時的な情動状

(2) 本論文では主として、意識的な顕在的自尊感情を扱い論じている。IAT (Implicit Association Test) などで測定され、近年注目を浴びている無意識的な潜在的自尊感情は扱わない。顕在的自尊感情と潜在的自尊感情の関係などについては、たとえば藤島 (2010) や上瀬 (2014) などを参照されたい。

態を“状態不安”と呼び、不安の感じやすさについての比較的安定した個人差を“特性不安”と呼んだ。それまでの不安研究における結果の不一致は、状態不安と特性不安を区別していなかったことが原因であると明らかになった。不安を状態-特性の視点から区別してとらえる考え方は、状態-特性不安理論 (state-trait anxiety theory) としてまとめられている (Spielberger, 1972 a, 1972 b)。

おそらく、Spielberger が不安の研究において“状態-特性”という枠組みをうまく活用したことの影響を受けて、その後、自尊感情の研究にも“状態-特性”という枠組みが持ち込まれていったのであろう。状態自尊感情 (state self-esteem) は、個人の経験や認知によって状态的に変化する自尊感情である。これは経験した出来事に随伴した自己価値の感覚であり、瞬間的な感情的反応を意味する。したがって状態自尊感情は経験した出来事に応じて変動し得るのである。ただし不安とは異なり、生理・行動的反応を指標として状態自尊感情を測定することは、現状では困難である。

一方、特性自尊感情 (trait self-esteem) は、パーソナリティ特性のような個人の安定的な特徴としての自尊感情である。これは時間や状況を超えて比較的持続して、自己全体をどのように見ているかを意味する (Brown & Marshall, 2006)。したがって、特性自尊感情は変動しにくい性質を持つ。もちろん、ある程度安定していなければ (言い換えると変動性が高ければ)、それを“特性”と呼ぶことはできないだろう。

ここで、変化するものが状態自尊感情であり、まったく変化しないものが特性自尊感情である、という単純な定義には誤解があることに注意されたい。パーソナリティ特性がある程度の一貫性を保ちながらも、生涯を通じて変化するように (Roberts, Walton, & Viechtbauer, 2006; Srivastava, John, Gosling, & Potter, 2003)、特性自尊感情も長期間をかけて発達上の変化が生じる (Robins, Trzesniewski, Tracy, Gosling, & Potter, 2002; Trzesniewski, Donnellan, & Robins, 2003)。Rosenberg (1986) は自己概念の気圧的 (barometric) 変化とベースライン (baseline) の変化、という表現で、これ

らの違いを明確に整理している⁽³⁾。前者の気圧的变化とは、失敗経験や他者からのネガティブなフィードバックによって、短時間に起こる急速な変化である。これは状態自尊感情の変化を意味している。後者のベースラインの変化とは、長い時間をかけて生じる緩やかな変化である。ベースラインは特性自尊感情を意味するため、ベースラインの変化は特性自尊感情の変化を意味している。気圧的变化が大きく生じたときであっても、ベースラインの変化はごくわずかであるということが当然あり得ることとなる。

自尊感情における状態－特性論の展開：状態自尊感情研究を中心に

さて、自尊感情 (self-esteem) という概念へのもっとも古い言及は James (1890) までさかのぼることができる。James (1890) は、自尊感情を成功体験と個人の願望の関数 (自尊感情 = 成功 [success] / 願望 [pretensions]) として記述している。関数として定義することの前提には、“成功体験” という分子の程度、つまり目標達成に関わる成功や失敗の出来事の体験が変化すると、自尊感情の程度もそれに応じて変化するという発想がある。もう一方の“願望” という分母の程度、つまり理想的な自己のあり様に関する信念や認知についても同様である。したがって、James (1890) による定義は、自尊感情という概念に対して、個人の経験や認知によって状態的に変化する側面を含めたとらえ方であり、パーソナリティ特性のような個人の安定的な特徴のみを強調しているわけではないことが読み取れる (Mruk, 2006)。

このように、自尊感情の変化する側面については、すでに James (1890) の時代から言及されていたものの、実際にそれを状態－特性自尊感情という視点から概念化し、両者を対比的に測定する研究が登場するまでには随分と時間

(3) Rosenberg (1986) が気圧的－ベースラインという表現で言及した対象は、あくまで自己概念 (self-concept) である。しかしこの考えが James (1890) の自尊感情に関する記述に基づいている点や、自尊感情が自己概念の一部分や一側面とされることから、自尊感情という概念にも気圧的变化とベースラインの変化があると想定することに問題はないと考えられる (福沢・山口・先崎, 2013)。

がかかっている。Spielberger の状態－特性不安理論に触発されて、自尊感情研究における“状態”の視点が再発見された、と言えるかもしれない。たとえば、“state self-esteem”という語を用いたもっとも初期の研究として、Gaudry (1977) が挙げられる。この研究では、実験課題上の成功・失敗経験にともなう状態不安と状態自尊感情、そして特性自尊感情が測定されており、得点の変化や変数間の媒介関係が検討されている。

とりわけ適応との関係で考えてみると、これまで古くから多くの研究で取り扱われてきた自尊感情は“特性”に関するものであった。たとえば、自尊感情の低さは抑うつや精神疾患と関連し (Beck, 1967; Silverstone, 1991)、反対に自尊感情の高さは、学業成績の優秀さを始めとして、さまざまな適応的特徴と関連することが報告されている (Coopersmith, 1967; Harter, 2012; Rosenberg, 1979)。青少年の自尊感情を高めることは、非行や犯罪、成績不振や校内暴力、さらには若年妊娠からアルコールと薬物の乱用まで、ありとあらゆる社会問題を解決すると信じられていたほどである (Mecca, Smelser, & Vasconcellos, 1989)。

先に述べたように、高い自尊感情をもつことに基因する様々な適応上の問題は“状態”に関わる研究結果であり (たとえば, Baumeister, Campbell, Krueger, & Vohs, 2003)、これらは 1980 年代後半ないし 1990 年代から増加傾向にあると思われる (Wood, Anthony, & Foddis, 2006)。

ここで状態自尊感情に注目した研究をその方法論から概観すると、大きく 2 つの研究文脈に分類できる (市村, 2012)。第一は、自我脅威事態などの実験的操作にともなう状態自尊感情の変化を測定し、それらの経験がその後の感情や行動に及ぼす影響に注目する研究文脈である。第二は、いわゆる日記式調査法を用いて、一定期間の状態自尊感情を複数回測定し、自然な日常生活における自尊感情の変化やベースラインに注目する研究文脈である。

第一の実験的操作の研究文脈では、操作前・操作の最中・操作後、といったタイミングで、状態自尊感情を 1 回、あるいは数回くり返し測定する。近年、自尊感情の形成過程に関する理論的枠組みが発展するにつれ、それぞれの定義

や理論を背景として自我脅威の操作の種類も多様なものが採用されている。成功や失敗 (James, 1890) を実験課題上で経験させる手法を始めとして、他者との社会的比較 (自己評価維持モデル: Tesser, 1988), 対人的拒絶・受容を暗示するようなサイン (所属欲求理論: Baumeister & Leary, 1995; ソシオメーター理論: Leary, Tambor, Terdal, & Downs, 1995), 死が避けられないものであるという認識 (存在脅威管理理論: Solomon, Greenberg, & Pyszczynski, 1991), などがあげられる。これら社会心理学的な諸理論に関わる研究では、状態自尊感情の変動にもなって機能する自己制御的な反応や対処に注目している。これらの諸研究の進展が状態自尊感情研究をリードしたとも考えられるだろう。

第二の日記式調査の研究文脈では、一定期間にわたり、毎晩その日一日のことをふりかえって、状態自尊感情の測定がおこなわれる。他にも、日常生活の中で携帯させた機器によってアラームを鳴らし、その都度、状態自尊感情尺度に評定させるといった、経験抽出法 (Experience Sampling Method: ESM) が用いられる場合もある (Kernis et al., 1989)。いずれの方法でも、得られた複数回測定の状態自尊感情得点の個人内標準偏差を算出し、自尊感情の変動性 (stability of self-esteem) の指標とする。この指標には、日常生活における自尊感情の脅威への敏感さや、自己概念の脆弱さといった個人差が反映されると考えられている (Kernis et al., 1989)。さらにこの文脈では、複数回測定された状態自尊感情得点の個人内平均値を算出し、特性自尊感情の指標とすることがしばしばみられる。この場合、通常の単発測定 of 特性自尊感情と區別して、自尊感情のレベル (level of self-esteem) あるいはベースラインと呼ぶこともある。自尊感情が不安定な個人を査定する場合、ある一時点における自尊感情の単発測定の結果は、その個人の自尊感情の日常的なベースラインから大きく離れている可能性がある。個人の自尊感情のベースラインを知ろうとすると、単発測定の結果よりも自尊感情のレベルを算出した方がより正確な情報を得ることが期待できると指摘されている (Kernis et al., 1991)。こうした研究においては、一定期間における状態自尊感情の変化しやすさをとらえ

て、自己概念の脆弱さと関連した精神的健康に注目している。自尊感情の安定／不安定性に関わる問題は、Rosenberg (1986) によると、Erikson (1959) の研究において、自己の不確実性、自己不信感、アイデンティティ拡散、と呼ばれてきた問題と結びつくと言われている。

さて、それではこの状態自尊感情と特性自尊感情の両者の間にはどのような関係があるのだろうか。上述の日記式調査などで言うところのふだんの日常生活を通したベースラインは、前述のとおり言い換えるならば特性自尊感情であり、これが高いことは、基本的には精神的健康や社会的適応を幅広く反映しており、ポジティブな心理的特徴とみなすことができる。しかし、たとえ特性自尊感情が高い人であっても、これも上述のとおり状態自尊感情が短期間で容易に変化してしまったり、些細なことで大きく低下してしまう人は、精神的に健全であるとはいいがたい。不安定で高い自尊感情をもつ人は、そうでない人に比べて、日常生活の中で怒りや敵意といったネガティブ情動を頻繁に経験しており、抑うつ傾向が高いことも明らかにされている (Kernis et al., 1989; Kernis et al., 1991)。この両者、すなわち自尊感情の高さと不安定性、に関わるメタ分析では弱い負の関係がみいだせるものの、基本的には独立であると指摘されている (Okada, 2010)。おそらくは両者のそれぞれが独立的に個人の適応に機能すると考える必要がある。また適応指標としても多様なものが考えられるため、様々な適応に個別に状態-特性の自尊感情がそれぞれ関係してくるのであろう。特性自尊感情の高さはもちろん、それだけでなく、状態自尊感情の変化しやすさに注目することによって、自己概念が十分に確立されていないために生じる不適応的な状態、不安定で脆弱な自尊感情のあり様、を把握することが重要となる。

そして状態-特性の自尊感情に関わる実証研究を進展させ、適応との関係をより明確にしていくためには、両者のそれぞれを的確に測定できる簡便なツールが必要であろう。さらには多くの研究で統一的に利用でき、可能であれば状態-特性の両者の程度を相互比較できるのであれば、その有用性は増大する。そこで次節では、最後に状態自尊感情の測定を中心に論じたい。

状態自尊感情の測定と展望

ここでは、状態自尊感情の測定方法の現状を述べ、さらに今後の研究の進展を促すために、状態自尊感情を少数項目尺度によって測定することを新たに提案し、その可能性を示しておきたい。なお、特性自尊感情の測定に関しては、既存の多くの充実したレビューを参照されたい（たとえば、Blascovich & Tomaka, 1991; Donnellan et al., 2015; Heatherton & Wyland, 2003）。

自尊感情の測定尺度：状態自尊感情を中心に

心理尺度を用いた測定は、特性自尊感情（遠藤, 1999）と状態自尊感情（竹田・川本・渡邊・サトウ, 2010）の双方で、もっとも頻繁に用いられている代表的な方法である。特性自尊感情の測定尺度はこれまで数多く開発されてきたが、実際に長年にわたって世界的に広く使用されている尺度は、Rosenberg（1965）の10項目の尺度を代表として、いくつかに限られている（榎本・田中, 2006; Gray-Little, Williams, & Hancock, 1997）。一方、状態自尊感情の測定尺度については、それぞれの研究の目的によって、内容の異なる尺度が使用されている。現在のところ、特性自尊感情の測定尺度の状況と比べると、一貫して広く使用されている状態自尊感情の測定尺度を挙げることは難しい。概観すると、状態自尊感情の測定尺度は、自尊感情に関連する気分（mood）を測定する方法と、既存の特性自尊感情尺度を応用する方法、の2種類に大別できる。

前者の方法として、McFarland & Ross（1982）は、自尊感情に関連する気分を表した形容詞（pride, competence, confidence, inadequate, worthless, など）を示し、今この瞬間どのように感じているか（how you feel right now）を評定するように教示する方法をとった。これと同様の状態自尊感情の測定方法は、後に多くの研究で採用されているが、使用する形容詞の種類や評定方法は研究ごとにさまざまに改変されており、一貫していない。その中には

不安 (anxious), 抑うつ (depressed), 恥 (ashamed), 困惑 (embarrassed), 幸福 (happy) を表す感情語までが, 状態自尊感情の測定尺度の中に含まれていることもある (遠藤・坂東, 2006; Leary, Haupt Strausser, & Chokel, 1998; 宮崎・池上, 2011; Nezlek, Kowalski, Leary, Blevins, & Holgate, 1997)。状態自尊感情の2つの研究文脈のうち, 実験的操作を用いる文脈における状態自尊感情の測定では, 実験操作にかかる数分から数十分程度の非常に短い間隔で状態自尊感情が測定され, その変化が目目される。そのため, こうした気分や感情といった一過性の心理状態を尋ねる尺度が使用されることが多い。一例として Leary et al. (1998) では, 他者からネガティブな評価を受けたり, 対人的拒絶を被る状況において, 状態自尊感情の測定には McFarland & Ross (1982) に基づいた尺度を用いている。なお, この研究文脈における特性自尊感情の測定には Rosenberg (1965) の自尊感情尺度がしばしば用いられる。

一方, 後者の方法として, Kernis et al. (1989) は, 特性自尊感情の測定尺度である Rosenberg (1965) の自尊感情尺度をそのまま利用し, 教示文で今現在の状態について評定するよう指示することによって, 状態自尊感情を測定している。また, Heatherton & Polivy (1991) は, 既存の特性自尊感情尺度である Janis-Field Feeling of Inadequacy Scale (Fleming & Courtney, 1984; Janis & Field, 1959) を基盤として, 項目の変更や取捨選択, 教示の設定により, 新たな状態自尊感情の測定尺度である State Self-Esteem Scale を開発している。わが国においても同様の方法によって, 阿部・今野 (2007) が, Rosenberg (1965) の自尊感情尺度を基盤とする状態自尊感情尺度を開発している。状態自尊感情の2つの研究文脈のうち, 日記式調査法を用いる文脈では, およそ一週間の間, 一日に1回から2回, 数時間以上の間隔で状態自尊感情が測定される。この場合, 多くの特性自尊感情尺度と同じように, 自己価値への評価や自己への好意を尋ねる尺度がしばしば使用される。一例として市村 (2012) では, 状態自尊感情尺度 (阿部・今野, 2007) を用いて毎晩くり返し測定した状態自尊感情の尺度得点から, 個人内標準偏差を算出して

自尊感情の変動性の指標とし、個人内平均値を算出して自尊感情のレベル（特性自尊感情）の指標としている。

このように状態自尊感情の2つの研究文脈とともに、状態-特性自尊感情のどちらもが注目されているが、それぞれの測定方法や内容は同一ではない。そう考えると、自尊感情を状態-特性の両概念から検討しなければならないだけでなく、状態自尊感情、特性自尊感情のそれぞれにおいても、その言葉で意味する内容が研究間で異なっている可能性もあり得る。実験的操作場面で測定される数十分間隔で変化する気分的な状態自尊感情と、日記式調査法場面で測定される数時間から24時間程度の間隔で変化する自己評価的な状態自尊感情は、同じ状態自尊感情とみなせるのだろうか。同様に、単発測定でふだんの自分自身について評定させた特性自尊感情と、およそ一週間かけて毎晩測定された自尊感情の個人内平均値は、同じ特性自尊感情とみなせるのだろうか。

今後の展望

上述の疑問は、各研究における測定手続きの違いや、測定尺度の違いが複雑に絡み合っており、いっそう解釈が困難になっている。また、状態-特性自尊感情に関連する諸概念をすべてひと括りにまとめて、定義や用法を単一に統合するような試みで問題が解決するとも言いきれない。そのような試みは、個々の研究が重視する側面や、それぞれに強調したい部分など、概念の定義に含まれた多種多様な内容を、十把一絡げに捨て去ってしまう危険性がある（溝上、2014）。

そこで、実際の測定に用いる尺度を基準とし、測定ツールを共通点とすることで、何を測っているのか、どのような概念をとらえているのか、について一定のコンセンサスを得られる可能性がみいだせないだろうか。共通の測定ツールは測定結果を直接的に比較可能なため、研究間の不一致や矛盾の解明への一助となるだろう。実際、Rosenberg（1965）の自尊感情尺度が、開発から50年近く経過してなお、現在も特別頻繁に利用され続けているのは、これまで数多くの先行研究で利用されてきたという、一種のデファクトスタンダードが

形成されているとみなすこともできる。そして、このことは Rosenberg (1965) の自尊感情尺度の項目数が 10 項目とさほど多くないことも、おそらく無関係ではない (並川・脇田・野口, 2010)。なぜなら、尺度の項目数が多くなるほど、回答のために費やされる時間・紙幅・認知的負荷も増大し、適用可能な場面が限られるためである。

自尊感情と適応の関係について、矛盾無く明瞭な知見を蓄積していくためには、今後の研究において、状態-特性自尊感情の両者について、さらには状態自尊感情研究の 2 つの文脈に依存せず、いずれであっても簡便に測定でき、相互に比較可能な測定ツールが求められる。そのためには自尊感情の少数項目尺度が有用だろう。特性自尊感情の測定尺度としては、すでにいくつかの少数項目尺度が開発されている (Bagley, 2005; 箕浦・成田, 2013 a, 2013 b; Robins, Hendin, & Trzesniewski, 2001)。多数項目の特性自尊感情尺度を基盤として、教示や項目を改変することによって新たに状態自尊感情尺度を開発している先行研究の方法と同様に考えれば、少数項目の特性自尊感情尺度を基盤として、新たに少数項目の状態自尊感情尺度を開発する道が開けているといえよう。実際、少数項目の特性自尊感情尺度である 2 項目自尊感情尺度 (Two-Item Self-Esteem scale: TISE; 箕浦・成田, 2013 a, 2013 b) を応用した少数項目の状態自尊感情尺度の開発も既に一部おこなわれている (箕浦・成田, 印刷中)。2 項目自尊感情尺度による状態自尊感情の測定は、前述のとおり、幅広い研究用途で共通して利用できる可能性が高いというメリットがあるため、今後の研究成果の結実が待望される、重要度の高い尺度開発であると考えられる。

引用文献

- 阿部美帆・今野裕之 (2007). 状態自尊感情尺度の開発. *パーソナリティ研究*, 16, 36-46.
- Bagley, C. (2005). Robustness of two single-item self-esteem measures: Cross-validation with a measure of stigma in a sample of psychiatric patients. *Perceptual and Motor Skills*, 101, 335-338.

- Baumeister, R. F. (1998). The self. In D. T. Gilbert, S. T. Fiske, & G. Lindzey (Eds.), *The handbook of social psychology, 4th., vol.1.* (pp.680-740). New York, NY: McGraw-Hill.
- Baumeister, R. F., Campbell, J. D., Krueger, J. I., & Vohs, K. D. (2003). Does high self-esteem cause better performance, interpersonal success, happiness, or healthier lifestyles? *Psychological Science in the Public Interest, 4*, 1-44.
- Baumeister, R. F., Heatherton, T. F., & Tice, D. M. (1993). When ego threats lead to self-regulation failure: Negative consequences of high self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology, 64*, 141-156.
- Baumeister, R. F., & Leary, M. R. (1995). The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin, 117*, 497-529.
- Baumeister, R. F., Smart, L., & Boden, J. M. (1996). Relation of threatened egotism to violence and aggression: The dark side of high self-esteem. *Psychological Review, 103*, 5-33.
- Beck, A. T. (1967). *Depression: Clinical, experimental, and theoretical aspects.* New York, NY: Harper & Row.
- Blascovich, J., & Tomaka, J. (1991). Measures of self-esteem. In J. P. Robinson, P. R. Shaver, & L. S. Wrightsman (Eds.), *Measures of personality and social psychological attitudes.* San Diego, CA: Academic Press, pp.115-160.
- Brown, J. D., & Marshall, M. A. (2006). The three faces of self-esteem. In M. H. Kernis (Ed.), *Self-esteem issues and answers* (pp.4-9). New York, NY: Psychology Press.
- Bushman, B. J. & Baumeister, R. F. (1998). Threatened egotism, narcissism, self-esteem, and direct and displaced aggression: Does self-love or self-hate lead to violence? *Journal of Personality and Social Psychology, 75*, 219-229.
- Coopersmith, S. (1967). *The antecedents of self-esteem.* San Francisco, CA: Freeman.
- Donnellan, M. B., Trzesniewski, K. H., & Robins, R. W. (2015). Measures of self-esteem. In G. J. Boyle, D. H. Saklofske, & G. Matthews (Eds.), *Measures of personality and social psychological constructs* (pp.131-157). London: Elsevier.
- 遠藤辰雄・井上祥治・蘭 千壽 (1992). セルフ・エスティームの心理学 ナカニシヤ出版
- 遠藤由美 (1999). 自尊感情 self-esteem 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁枘算男・立花政夫・箱田裕司 (編) 心理学辞典 (pp.343-344) 有斐閣

- 遠藤由美・坂東哲也 (2006). 他者からのフィードバックの解釈に影響を及ぼす自尊感情の効果 関西大学社会学部紀要, 38, 39-55.
- 榎本博明・田中道弘 (2006). 自尊感情測定尺度の現状と課題 人間学研究 (名城大学人間学部), 4, 41-51.
- Erikson, E. H. (1959). Identity and the life cycle: Selected papers. *Psychological Issues, 1*, 1-171.
- Fleming, J. S., & Courtney, B. E. (1984). The dimensionality of self-esteem: II. Hierarchical facet model for revised measurement scales. *Journal of Personality and Social Psychology, 46*, 404-421.
- 藤島喜嗣 (2010). 自尊感情と自己関連動機に基づく推論の歪み 村田光二 (編) 現代の認知心理学 6 社会と感情 (pp.74-97) 北大路書房
- 福沢 愛・山口 勳・先崎沙和 (2013). 自尊心のレベル・変動性と将来への肯定的な期待との関連 - 遠い将来への肯定的な期待が持つ脅威軽減機能について パーソナリティ研究, 22, 117-130.
- Gaudry, E. (1977). Studies of the effects of experimentally induced experiences of success of failure. In C. D. Spielberger, & I. G. Sarason (Eds.), *Stress and anxiety volume 4* (pp.95-116). Washington, DC: Hemisphere Publishing Corporation.
- Gray-Little, B., Williams, V. S. L., & Hancock, T. D. (1997). An item response theory analysis of the Rosenberg self-esteem scale. *Personality and Social Psychology Bulletin, 23*, 443-451.
- Harter, S. (2012). *The construction of the self: developmental and sociocultural foundations* (2nd ed.). New York, NY: Guilford Press.
- Heatherton, T. F., & Polivy, J. (1991). Development and validation of a scale for measuring state self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology, 60*, 895-910.
- Heatherton, T. F., & Wyland, C. L. (2003). Assessing self-esteem. In S. J. Lopez, & C. R. Snyder (Eds.), *Positive psychological assessment: A handbook of models and measures* (pp.219-233). Washington, DC: American Psychological Association.
- 市村美帆 (2012). 自尊感情の変動性の測定手法に関する検討 パーソナリティ研究, 20, 204-216.
- James, W. (1890). *The principles of psychology*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Janis, I. L., & Field, P. B. (1959). Sex differences and personality factors related to persuasibility. In C. I. Hovland, & I. L. Janis (Eds.), *Personality and per-*

- suasibility* (pp.55-68). New Haven, CT : Yale University Press.
- 上瀬由美子 (2014). 自尊感情と社会的行動 稲垣佳世子・高橋恵子 (編) 児童心理学の進歩 2014 年版 53 巻 (pp.47-72) 金子書房
- Kernis, M. H., Grannemann, B. D., & Barclay, L. C. (1989). Stability and level of self-esteem as predictors of anger arousal and hostility. *Journal of Personality and Social Psychology*, *56*, 1013-1022.
- Kernis, M. H., Grannemann, B. D., & Mathis, L. C. (1991). Stability of self-esteem as a moderator of the relation between level of self-esteem and depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, *61*, 80-84.
- 古賀愛人 (1980). 状態不安と特性不安の問題 心理学評論, *23*, 269-292.
- Leary, M. R., Haupt, A. L., Strausser, K. S., & Chokel, J. T. (1998). Calibrating the sociometer : The relationship between interpersonal appraisals and state self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, *74*, 1290-1299.
- Leary, M. R., Tambor, E. S., Terdal, S. K., & Downs, D. L. (1995). Self-esteem as an interpersonal monitor : The sociometer hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, *68*, 518-530.
- McFarland, C., & Ross, M. (1982). Impact of causal attributions on affective reactions to success and failure. *Journal of Personality and Social Psychology*, *43*, 937-946.
- Mecca, A. M., Smelser, N. J., & Vasconcellos, J. (Eds.). (1989). *The social importance of self-esteem*. Berkeley, CA : University of California Press.
- 箕浦有希久・成田健一 (2013 a). 2項目自尊感情尺度の開発および信頼性・妥当性の検討 感情心理学研究, *21*, 37-45.
- 箕浦有希久・成田健一 (2013 b). 2項目自尊感情尺度の提案-評価と受容の2側面に注目して- 人文論究 (関西学院大学文学部紀要), *63*, 129-147.
- 箕浦有希久・成田健一 (印刷中). 2項目自尊感情尺度を用いた状態自尊感情測定尺度の開発-妥当性に関する多側面からの検討- 感情心理学研究
- 宮崎弦太・池上知子 (2011). 関係喪失のコストが社会的拒絶への反応に及ぼす影響 : 相互依存理論とソシオメーター理論による統合的アプローチ 社会心理学研究, *26*, 219-226.
- 溝上慎一 (2014). 自己意識・自己形成 後藤宗理・二宮克美・高木秀明・大野 久・白井利明・平石賢二・佐藤有耕・若松養亮 (編) 新・青年心理学ハンドブック (pp.114-126) 福村出版
- Mruk, C. J. (2006). *Self-esteem research, theory, and practice : Toward a positive psychology of self-esteem* (3rd ed.). New York, NY : Springer Publishing Company.

- 並川 努・脇田貴文・野口裕之 (2010). 日本における自尊感情尺度使用の状況と課題 教育心理学フォーラムレポート, FR-2010-01.
- Nezlek, J. B., Kowalski, R. M., Leary, M. R., Blevins, T., & Holgate, S. (1997). Personality moderators of reactions to interpersonal rejection: Depression and trait self-esteem. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 23, 1235-1244.
- Okada, R. (2010). A meta-analytic review of the relation between self-esteem level and self-esteem instability. *Personality and Individual Differences*, 48, 243-246.
- 岡村尚昌・津田 彰 (2013). 不安 藤永 保 (監修) 最新心理学事典 (pp.660-664) 平凡社
- Roberts, B. W., Walton, K. E., & Viechtbauer, W. (2006). Patterns of mean-level change in personality traits across the life course: A meta-analysis of longitudinal studies. *Psychological Bulletin*, 132, 1-25.
- Robins, R. W., Hendin, H. M., & Trzesniewski, K. H. (2001). Measuring global self-esteem: Construct validation of a single-item measure and the Rosenberg self-esteem scale. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 27, 151-161.
- Robins, R. W., Trzesniewski, K. H., Tracy, J. L., Gosling, S. D., & Potter, J. (2002). Global self-esteem across the life span. *Psychology and Aging*, 17, 423-434.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Rosenberg, M. (1979). *Conceiving the self*. New York, NY: Basic Books.
- Rosenberg, M. (1986). Self-concept from middle childhood through adolescence. In J. Suls, & A. G. Greenwald (Eds.), *Psychological perspectives on the self*. (Volume 3., pp.107-136). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Silverstone, P. H. (1991). Low self-esteem in different psychiatric conditions. *British Journal of Clinical Psychology*, 30, 185-188.
- Solomon, S., Greenberg, J., & Pyszczynski, T. (1991). A terror management theory of social behavior: The psychological functions of self-esteem and cultural worldviews. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol.24. (pp.93-159). New York, NY: Academic Press.
- Spielberger, C. D. (1966). Theory and research on anxiety. In C. D. Spielberger (Ed.), *Anxiety and behavior* (pp.3-20). New York, NY: Academic Press.
- Spielberger, C. D. (1972 a). *Anxiety: Current trends in theory and research*,

- Vol.1. New York, NY : Academic Press.
- Spielberger, C. D. (1972 b). *Anxiety: Current trends in theory and research*, Vol.2. New York, NY : Academic Press.
- Srivastava, S., John, O. P., Gosling, S. D., & Potter, J. (2003). Development of personality in early and middle adulthood: Set like plaster or persistent change? *Journal of Personality and Social Psychology*, 84, 1041-1053.
- Tafarodi, R. W., & Swann, W. B., Jr. (1995). Self-liking and self-competence as dimensions of global self-esteem: Initial validation of a measure. *Journal of Personality Assessment*, 65, 322-342.
- 竹田 剛・川本静香・渡邊卓也・サトウタツヤ (2010). 過去 20 年間の海外における状態自尊感情研究の展望 (1) - 研究動向の概括的検討 - 日本パーソナリティ心理学会第 19 回大会発表論文集, 43.
- Tesser, A. (1988). Towards a self-evaluation maintenance model of social behavior. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol.20. (pp.181-227). New York, NY : Academic Press.
- Trzesniewski, K. H., Donnellan, M. B., & Robins, R. W. (2003). Stability of self-esteem across the life span. *Journal of Personality and Social Psychology*, 84, 205-220.
- VandenBos, G. R. (Ed.). (2007). *APA Dictionary of Psychology*. Washington, DC : American Psychological Association. (ファンデンボス, G. R. 繁榊算男・四本裕子 (監訳) (2013). APA 心理学大辞典 培風館)
- Wood, J. V., Anthony, D. B., & Foddis, W. F. (2006). Should people with low self-esteem strive for high self-esteem? In M. H. Kernis (Ed.), *Self-esteem issues and answers* (pp.288-296). New York, NY : Psychology Press.
- Zeigler-Hill, V. (2013). The importance of self-esteem. In V. Zeigler-Hill (Ed.), *Self-esteem* (pp.1-20). New York, NY : Psychology Press.

——箕浦有希久 大学院文学研究科研究員——

——成田 健一 文学部教授——